

# 夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

(第3回)

## コンサートのドレスコード (服装規定)

明治の奏楽堂コンサートでは、ドレスコード(服装に関する規定)があった。日本で最初の音楽ホール、奏楽堂にはそんな歴史があった。クラシック音楽は今でも敷居の高いものと思われがちだが、よほど特殊なコンサートでない限り、服装の規定などない。自由である。

東京市(当時)は洋楽を普及させるために、日比谷公園のなかに野外音楽堂をつくった。明治38年8月1日落成。素人にわかりやすい、愉快で気分が高揚する行進曲や、陽気で楽しいワルツやマーチ、ギャロップがプログラムに組まれた。主として陸軍の戸山学校軍楽隊と海軍軍楽隊が交互に出演した。無料であった。普段着で行けた。夏はゆかたに下駄履きでもよかった。漱石は日比谷の音楽堂の落成のニュースには、ひどく関心を示しているが、コンサートには一度も行っていない。寺田寅彦の誘いにも、なにやかにや理由をつけて、結局は断っている。普段着のコンサートは、漱石の趣味に合わなかったようである。

東京音楽学校の後身、現東京藝術大学附属図書館には、明治25年11月27日午後1時半から開催された第1回「学友会演奏会」のチケットが現存する。そこにはドレスコードが印刷されていた。

「着服ハ洋服又ハ羽織、袴タルベシ」

『野分』(四)の中野君と高柳君の服装をみてみよう。秋で肌寒い日だったのであろうか。中野君

は、薄い羅紗の外套を着て、手に山羊の手袋を持っていた。外套のなかには、仕立て卸しのフロックコートを着ていた。チョッキ(胴衣)には、「近頃流行る白いスリッパ」が細く入っていた。おまけにカラーの頸元には、真珠のピンが輝いていた。タキシードでなかったのは、昼間のコンサートだったからである。

一方、高柳君はどうだったであろう。

わが穿く袴は小倉(木綿生地)の安物である。羽織は染めが剥げて、濁つた色の上に垢が容赦なく日光を反射する。湯には五日前に這入ったぎりだ。襦衣を洗わざる事は久しい。音楽会と自分とは到底両立するものでない。

中野君と高柳君は同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机をならべて生活し、同じ文科の同じ教授の講義を聴いて、同じ年の此夏に同じく学校を卒業した。当時の社会では上層階級である。高柳君の身なりは質素?だが、奏楽堂のコンサートのドレスコードには決して違反していない。

ところで、江戸っ子の漱石は、お洒落だった。明治41年3月22日の室内楽コンサートのときは、「フロックコートを着て、新らしい外套を着て行きたいので、チケットを買ってほしい」と寅彦にハガキを出している。「君、洋服を新調したから一つみてくれ」と頼まれることもあったという。

\*漱石の原文からの引用は、岩波文庫を使用しました。